

- 郁夫, 小泉明宏: 鉄と鋼, 69 (1983), p. 1510
- 9) 近藤喜代太, 柴崎豊作, 岩沼克彦, 木村篤光, 増野豈彦, 斉数正靖, 関口秀明: 鉄と鋼, 71 (1985), A146
- 10) 大高徹雄, 荒木 建: 金属表面技術, 34 (1983), p. 261
- 11) 松田 明, 吉原敬久, 宮地一明, 広岡靖博, 薦田章, 木村 肇: 鉄と鋼, 70 (1984), p. 86
- 12) 蟹江照行, 浅田栄一: 分析化学, 10 (1961), p. 791
- 13) 花岡紘一, 川又 尚, 浅田栄一: 分析化学, 22 (1973), p. 328
- 14) M. MURATA and K. MUROKADO: X-ray Spectrometry, 11 (1982), p. 159
- 15) 安井規子, 安部忠廣, 村田充弘, 尾松真之: 鉄と鋼, 69 (1983), S 310
- 16) JIS G 1256-1982

コ ラ ム

情報の洪水

研究らしき仕事をやりながら, 最近情報の量の多さにいささかうんざりしています。これは金属材料の分野ばかりでなく, 今流行のファインセラ, エレクトロニクスやバイオなどの分野ではもつと大変だと思えます。専門以外の自然科学, 社会科学や人文科学の情報にも興味がありますし, このほかに, どの道路でネズミ捕りをやっているとか, どこそこの定食が安くてうまいといった情報まで数え上げるときりがありません。これらの情報を受ける個人の側からいえば, 心掛けが良いほど, 入ってくる情報の種類も際限なく増えて, 能力を越えてしまいます。そこで, 専門情報とその他の情報とを分けて, 金属材料の範囲に限定しても, その処理すべき量は膨大なものになります。これらの情報の内いくつかは確かに自分にとって必要なものですが, 必要な情報の種類が時折変化することと, 悪いことに, 情報が金になることが広く知られるようになってから, そのために造られたものまでが一緒に

なつて, もう氾濫と呼ぶにふさわしい状態になっています。情報は研究と同じで, 無駄はつきものですよ, と教えられ, 全くそのとおりだと思いますが, 溺れる者にはワラの代わりにもなりません。本当に必要な情報を必要な量だけ, いかに正確かつ迅速に手に入れ, そして有効に活用するか, これが問題です。頭の良い人達はその人なりの方法を使つておられるようですし, なかには組織的にやつているケースもあります。また, その種の手法も販売されているようです。もちろん, この仕事でコンピューター君の目覚ましい活躍には脱帽するばかりですが, いまひとつ痒い所に届いていないような気がします。そこでこう考えました。目や耳といった比較的よく使っている器官だけに任せしておくのは考えものです。やはり五感すべてを総動員して, 逆に, この洪水の中にとび込んでいつて, 全身で情報を集めるとともに各器官の感度を高めることこそが当面の解決の方法ではないでしょうか。

(東洋鋼板(株) 渡辺忠雄)